

沼津市若山牧水記念館

第22号 1999. 3. 15

編集・発行 社団法人 沼津牧水会 TEL (0559) 62-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 FAX (0559) 62-0424



蝙蝠の盃

牧水記念館のロビー入口に、何気なく置かれたガラスケースがあつて、その中のほぼ中央に一つの盃がある。深い藍色の縁取りに柳と一匹の蝙蝠（かわほり・こうもり）を配した何でもない盃だが、牧水が長崎の弟子の一人から贈られたもので、やがて牧水の死を象徴するような逸話を残す盃である。

青柳に蝙蝠あそぶ絵模様の藍深きかもこの盃に

の歌がある。昭和二年頃から牧水は体調を崩し、『創作』昭和三年新年号「創作社便」に「…また半年も寝込むほどの病気をしてしまつた。さういふ意味に於ても今年の十二月から来年の一月に移るといふ平凡事がまことに常ならず考へられてならぬのである…」と書き、また、昭和三年八月三十一日付高橋希人宛の書簡に「小生も例の神経衰弱で脚が立たなくなり、且つまた胃腸にも影響してなまぐさ一切のものをようたべなくなり、果物と野菜と重湯と水と酒とで

過ごしてゐます。何とも陰気な気持ちで、弱つてゐます。然し『秋』になつたら直るだらうと自ら慰めてゐます。」と書いている。高橋希人氏は、『創作』の古くからの同人で、戦後二十一年に『創作』を復刊した際の七人の選者の一人。この書簡は、記念館の展示室の入り口に展示されているので御覧頂きたい。

当時の牧水は一日三升といわれた酒の量を減らすように医師に勧められ、また牧水自身も節酒を心掛けようとしながら到底不可能と悟つたような日々でもあつた。酒量はやや制限して、朝二合、昼二合、夕方六合と一日一升に決めていたが、それさえなかなか守れない生活が続いていた。

妻が眼を盗みて飲める酒なれば燵かまどで飲み噎むせせ鼻ゆこぼしつ
うらかなしはしたためにさへ気をおきて盗み飲む酒とわがなりにけり
足音を忍ばせて行けば台所にわが酒の壘は立ちて待ちをる

「合掌」と題する三首。蝙蝠の歌のすぐ後に載る。

この蝙蝠の盃は、こんな牧水が最後に親しんだ盃だつた訳で、死の当日まで愛用し、その枕元にあつたものを喜志子夫人が供養にと御棺の中に入れてあげたもの。ところが、火葬の炎をくぐり骨揚げの時、そのままの姿で現れ、更にその藍の色を深めたともいわれている。じつと見つめると、小さな盃の向こうに、酒に生き酒で死んだ牧水のあの童顔に近い素朴な面立ちが浮かんでくるようにも思ふのである。

牧水の死は同年九月十七日午前七時五十八分。死因は「急性腸胃肝臓硬変症」。告別式は十九日で、告別式の後に火葬にされたのだが、まだ残暑の厳しい折であつたにもかかわらず、告別式当日、親族や知人が最後の別れに際して、霊柩の小窓を開いたところ、屍臭はおろか、その顔面には一つの死斑もなかつたと伝えられる。主治医の稲玉医師も不思議がり、内部のアルコールの浸潤に因るものだろうと推察された。導師は乗運寺の先々代で京都百万遍知恩寺の法主となられた林彦明師であつた。

（須永秀生）

牧水、喜志子比翼の屏風

須永秀生

(沼津牧水会理事)

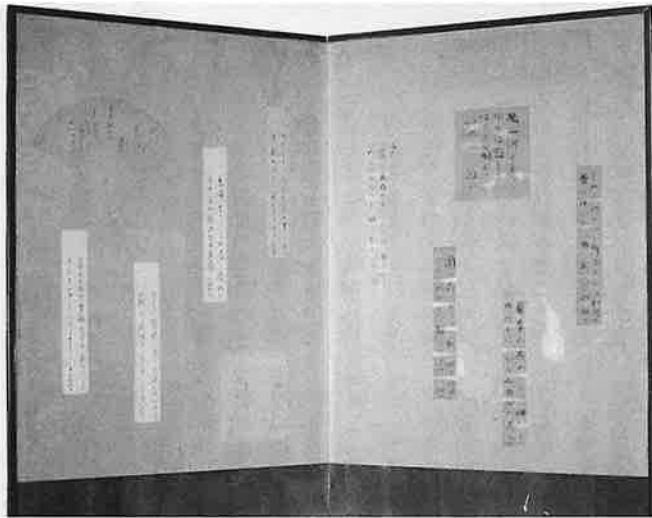
若山牧水の高弟の一人で、後に沼津市長となる長倉宜一氏は、牧水の沼津在住当時、御厨銀行に勤めていて、公私ともに牧水の後援者の役割を果たしていた。その宜一氏の御子息の長倉羊一氏（西間門在住・平成十年八月二十九日御逝去）の御遺族から今回牧水と喜志子に関わる重要な資料を寄贈していただいた。

ここに掲げる屏風もその中の一つである。比翼の屏風とでも名付けようか。右に牧水の短冊四点と色紙一枚。左に喜志子の短冊四点、色紙一枚、扇形色紙一枚を配置した貴重な屏風で、長倉宜一氏と牧水夫妻の交友の深さを如実に物語る逸品である。この屏風は、長倉氏が折に触れて買ったり頂いたりした短冊を屏風に貼付して作成したものと推察され、心ゆかしきものがある。

長倉宜一氏は前述したように沼津市長を務めた著名な方だが、創作社同人として大正から昭和前期に活躍し、作品は長倉汀峯の名で『創作』誌に多く残されている。牧水の沼津移住後は、経済的な面での寄与を始め、牧水なき後の一家の生活への物心両面の心遣いは多岐にわたり、牧水と喜志子からの感謝の手紙が何通か残されている。牧水が住宅新築を計画した際には、土地の手配から取得のための資金や新築の費用の捻出まで、その経済面に氏は配慮し、住宅新築の資金として、半切・色紙等の頒布会を沼津で行った際も、世話人の中心になった。新築の費用や雑誌『詩歌時代』の借財を一時肩代わりしたの

も氏であった。言わば牧水の経済面の補佐役として腕をふるい、当時の金で数万円もの借財の返還の手助けをしたのである。

比翼の屏風に貼付された作品について紹介する。



右側の牧水の作品は牧水流の文字で読み易く、また歌集に所載されているので、その制作年も推定される。

色紙の作品は千本松原の第一号の歌碑となった著名な「幾山河」

幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく
 (『海の聲』別離所載)

明治四十年六月から七月にかけて帰省途中に中国地方を旅した際に、高梁川の上流の二本松峠（現在の岡山県哲西町）で歌われた。上田敏訳の「山のあなただの空とおく」の詩の影響は顕著だが、多感な青年牧水のおこがれが滲み出ている、作者自身も気に入っていたらしく、多くの色紙や半折等を残している。短冊の作品は右から

しみじみとけふ降るあめは如月の春のはじめの
 雨にあらずや
 (『くろ土』所載)

『くろ土』は大正十年三月に新潮社から発行。牧水はその前年八月に沼津に移住して、上香貫の現在の本郷町に住んだ。この作品は大正八年の二月の作品。二月は酷寒の候だが、だからこそ「しみじみとけふ降る雨」なのであろう。流麗沈静な牧水の後期の歌風はこの作品あたりを嚆矢としていようか。若い時の心の叫びのような歌から、あるがままを受け入れてしみとおるような流れるリズムをもった後期の歌への変換のきつかけとなった歌の一つ。牧水三十五歳の作品である。

夏草の茂みがうへに伸びいでてゆたかになびく
 山百合の花
 (『白梅集』所載)

『白梅集』は大正六年八月、喜志子夫人との合著の歌集として発刊された貴重なもの。牧水は喜志子の作品を本人にはぼろくそけなしながら、外に向か

つては希有の自我の発露を褒めていたと言われている。この作品は北下浦の頃の作品であろうか。仕事かと思うようにいかず自嘲と焦燥感に苛まれる作品が多い中で救いのような歌。本人もそんな自覚からか、後にこの作品も多く色紙に残した。なお、喜志子の作品は「夕さればきまりて酒を煮ることのたのしきわが家早く戸をさす」など、三浦半島の自然と生活を主としたリリズムあふれるもので、牧水に本来の姿を取り戻す発奮のきっかけとなったともいわれる。

園の花つぎつぎに秋に咲き移るこのごろの日の
静けかりけり
（『山櫻の歌』所載）

『山櫻の歌』は大正十二年の発刊。この作品は大正十年、香貫山のふもとに住んでいた時の作で、この園は「香貫の家」の庭であろうか。

窓に見るながめあらはに冬さびてただありがた
き日のひかりかな
（『くろ土』所載）

大正八年の作品。大正七年は、四月に次女真木子が生まれ、七月には六歳の長男旅人と長女みさきと共に腸チブスを病み、牧水も真木子も具合が悪くなり、更には『創作』発刊の無理で経済的にも行き詰まり、最低の生活環境にいた。そこからようやく這い上がり、やや息をつぎ、東京を離れることを考え始めた頃の作品と思われる。

屏風の喜志子の作品は、大正六年頃から昭和十一年頃までのもので『若山喜志子全歌集』にない作品もある。

左上の扇形色紙の作品

いさかひもなくて育ちし四人の子のよたりが笑
める顔のゆたけさ
（『埴鈴集』所載）

『埴鈴集』は昭和十五年発刊の河出書房の『現代短歌』第三巻に収められた作品集。『現代短歌』は全五巻で北原白秋、釈道空、今井邦子等二十五人の歌人の作品集。この歌は昭和十一年の作。母と子と題される四首の一。歌集では五句が「面のゆたけさ」となっている。

短冊の作品は右から

めでましし人はかくれて年ふれど老樹のさくら
いやまさり咲け
（『全歌集』になし）

「めでましし人」は牧水か。「老樹のさくら」は「市道の家」の庭にあつた牧水自慢の桜と思われる。いづれにしても昭和十二年に沼津を離れるまでの作品であろう。

鳥啼けばこゝろのどけし青物のくき立つ頃のそ
の鳥の聲
（『筑摩野』所載）

『筑摩野』は昭和五年、第三歌集として改造社から出版。創作女流の会「つくまの会」のきつかけとなる。作品は大正十年の作。東京から沼津の香貫に移り住んで、落ち着いた生活の中から作品が清澄さを増していく過程の作か。「山焼ぞ見にいで来よとよぶ声は夫のこゑなり夕闇の背戸に」などの一連に配されている。

なにに怖れていましめ解かぬ心ぞも萩は花咲き
こぼるるものを
（『筑摩野』所載）

大正六年五月、牧水一家は巢鴨天神山に転居する。折しも九州坪谷から牧水の母まきが上京中で、姑と一か月余りの生活は喜志子には充実したものであつたようである。「相棲みていくとせの身ぞあなおかし茨を折るとてうらはづかしき」の初々しさもこの「巢鴨の家」と題した一連の作品の中にはあり、心の振幅の大きさが想像される。

富士のねの雪解の水を庭に引きてながき命をた
のみまししを
（『全歌集』になし）

昭和二年、「市道の家」の庭に井戸を掘った。当時の千本地区は何処を掘ってもほとんど清水が湧き、牧水の家の井戸も水が吹き上げるほどだったという。この作品は下句の嘆きからみて昭和三年の牧水没後の作と推定される。「九月十七日我が生涯の遂の悲しみにあふ」の詞書のある「うてばひびくいのちのしらべしらべあひて世にありがたき二人なりしを」などもある。

最後に右下の色紙の作品は

はに鈴のほろろこほろぎ夜もすがらまくらのし
たのあたりにて鳴く
（『現代短歌叢書』所載）

『現代短歌叢書』は全十巻で、佐佐木信綱をはじめ当時の現代歌人四十五人の作品を集めた大作品集。この作品は春の息吹と小題のつく十六首の一つ。昭和九年の作。

第三回若山牧水賞に永田和宏氏



受賞作『饗庭』は永田氏の故郷の地名である。

「あとがき」によれば、琵琶湖の湖西地方、比良山系が尽きて、なだらかに北につづくあたりが饗庭野で、『日本書紀』に天智天皇は蝦夷^{カマヤマト}に対して御饗^{ミケ}を催したとの記述があるが、それが地名の由来ではないかという。

選考委員の講評で、大岡信氏は「ユーモアがない歌は読む気もしないし、くたびれる。しかし、ユーモアは人生の経験の総和からにじみ出るものであって、意図して出来るものではない。永田さんにもそういう年の功が生まれてきた。また、どの歌にもその考え方、思考方法に柔軟な屈折がある。そして、読んだ人が幸せになるのが大きな特徴だ。」と評し、同じく岡野弘彦氏は「生き物や家族に届いている心の動きと、表現が独特である。特に歌集後半部分に入って、やや心の沈潜した作品の中に滲み出すエロスの哀れといった気分が作者の新しい領域をうかがわせる。」と評した。

宮崎県、宮崎県教委、延岡市、東郷町、宮崎日日新聞社主催の「第三回若山牧水賞」に永田和宏氏の『饗庭(あえば)』が決定し、授賞式は二月六日、宮崎観光ホテルで行われた。

永田氏は昭和二十二年滋賀県生れ。京都大学理学部卒業、京都大学教授。「塔」短歌会編集代表、南日本新聞歌壇選者。大学在学中に作歌を始め、妻の歌人河野裕子さんと出会い、その時交わした相聞歌は今も歌壇で語り継がれるほど有名である。平成九年に第五歌集『華氏』で第二回寺山修二賞。今年第六歌集『饗庭』で第五十回読売文学賞詩歌賞を受賞した。歌集に『メビウスの地平』『黄金分割』『無限軌道』『やへるま』がある。

授賞式後の記念講演で、選考委員馬場あき子氏は、「牧水の自然と愛」と題して、「日向の国むら立つ山のひと山に住む母恋し秋晴れの日や」の歌をとりあげ、「秋晴れの日や」という強い詠嘆の中で、牧水が考えたのは何だったのか。それは、「故郷の日向のむら立つ山の姿を思い、その山のひとつに住む母を想う時、母が急に重い存在として身近な切実なものとなって響いてくる。牧水にとって、母と風土とはほとんど一つの表情で心の中にある。」などと、牧水の

自然と人間への愛について語った。

翌日は会場を東郷町へ移し、永田氏による「牧水のなつかしさ」と題する受賞記念講演会が行われ、「牧水は約二十年間の作歌活動で七千首余りを詠んでいるが、これには驚異的なエネルギーが必要だ。そして牧水の歌には何かへの憧れが詠まれているが、その憧れは決して達成出来る当てもないものだから非常に自虐的にならなければならなかったのだろう。牧水の求めてやまないものが all or nothing にあり、我々に訴えるものがある。」と述べた。

『饗庭』から数首を紹介する。

やわらかき春の雨水の濡らすなき恐竜の歯は
こり浮く見ゆ

水鳥の水走る間の蹠^{あしづ}のこそばゆからむ笑いたか
らむ

つまらなそうに小さき石を蹴りながら橋を渡り
てくる妻が見ゆ

小さき脳をスライスにして染めているこの学生
は茂吉を知らぬ

酔っていることのみ告げて切れしかば夜の受話
器はとろりと重い

今回の授賞式には、宮崎県東京物産観光センターの青木康所長、東京牧水会の田原大三事務局長のお誘いを受け、沼津牧水会から十一名が参加した。一泊二日の短い時間ではあったが、牧水が愛してやまなかった故郷に接することができ、宮崎県、延岡市、東郷町の方々の手厚いもてなしを受け、楽しい旅になった。心から御礼を申し上げます。

(事務局 大島葉子)